

第10回 登別市中小企業地域経済振興協議会 議事録

平成26年10月16日(木) 18時30分～

登別商工会議所 会議室

- ◆出席委員：斎藤 正史 委員
 - 川田 弘教 委員
 - 守屋 聡 委員
 - 千葉 洋子 委員
 - 二瓶 秀幸 委員
 - 松山 哲男 委員
 - 松田 毅 委員
- 計7名

- ◆事務局：商工労政グループ伊東商工労政・新エネルギー主幹
奥田主査
竹中担当員

- ◆登別商工会議所事務局：田村事務局長

- ◆議題：【登別市における各産業分野の現状】
～観光産業の現状について～

講 話 者

今年度については、相対的な宿泊数は落ちているものの、単価の高い客層が多く来ている為、収益自体は横ばいである。

観光に関する取組としては、近年の観光ニーズに対応するため、登別市の単独事業のみならず、近隣市町と連携を図り、広域での観光誘客に取り組んでいる。特に、登別観光協会とは、外国語に対応した観光案内所の運営や、草津温泉や台湾国台中市との姉妹連携、観光イベントの実施等の連携を図っている。

登別温泉の姉妹温泉である草津温泉は、全国屈指の温泉であるが、登別温泉も屈指の温泉地であり、全国5位以内の常連である。平成14年に登別温泉を舞台にしたドラマが放送され、そこで初めて全国1位になっている。

草津温泉は多くの旅行会社からの人気があり、首都圏のお客様からの人気もある。大きな要因は湯畑や泉質の良さである。

地獄まつりについて触れるが、かつて登別温泉は2月と8月の入込客が非常に不調であり、特に8月から9月下旬にかけては壊滅的であった。その時の先人たちが不況を払拭しようとしたのが「登別地獄まつり」である。

草津温泉のお祭りは、草津の女神を選出するというシンプルなものである。これが人々から受け入れられ愛されている理由は、温泉が人々から愛され、多くの人々がお湯の恩恵を受け、感謝するために集まっているからだと思われる。登別のお祭りに例えると、冬の湯まつりにあたるものである。天から与えられた貴重な資源である温泉を多くの人々の役に立つ為に使うということが我々の役目である。草津温泉は我々にとって見習うべき温泉である。

今の登別温泉は外国人観光客の割合が高い。私の宿は日本人のお客様が多いことが取り柄の宿であるが、本日の宿泊者を調べてみると、満室の中、

約半数が外国人である。よく、日本人の中に、外国のお客様が来ると顔をしかめる人がある。しかし、「Visit Japan」という国策の中で数千万単位のお客様を受け入れるといった時に、マナーの悪いお客様を受け入れる辛抱強さを持っていなければ、観光が良い方向に進まない。来訪する全てのお客様が良い人だとは限らないが、寛容な精神で多くの外国人観光客を迎える必要がある。

登別温泉における海外戦略は私が平成8年に始めたものなのだが、平成4年のバブル崩壊と共に、会社の費用で旅行していた時代から個人費用で旅行をする時代へと変貌を遂げた。

平成4年を境に登別温泉の客数に減少を見せ始めた。当時の旅館やホテルは400室ものが多かったが、客数の減少により稼働率が下がってってしまった。その当時（平成8年）に考えられたのが、「450・180作戦」である。これは450万人の日帰りを含めた総入込と180万人の宿泊客を達成する為の作戦である。しかし、この数字はあくまで目安であり、現在においても目標とする数字だ。ただ、この数字を超えたとしても、地域として成り立つようなインフラ整備を含めたまちづくりが必要である。

登別温泉は泉質が良く、冬に湯治で来訪するお客様が多い。冬の旅行客が多いという特異な温泉地である。また、ツアーで来訪するお客様も多い。私たちは登別温泉の弱点を逆にウリにするためにそれぞれの客層を分析した。日本の人口構造を考えた場合、当時から少子高齢化は遠くない将来到来すると思われていた。従って、国内の需要は減るため、この部分の穴埋めを考えていたところ、周辺の東アジアの経済が成功しているという情報から、この地域をターゲットにすることになった。

先ほど地獄まつりの話をしたが、昨年50回目を迎えることができた。そこで、100回目に向

けて何かを変えていくことも考える必要がある。今の登別温泉は夏に観光のピークを迎えており、当初の祭りの目的である閑散期の誘客は既に達成されている。今後も夏季にこの祭りをする意味はあるのだろうか、地獄まつりを別の祭りに変えたほうが良いのだろうかといった、様々な論議をし、100回目に向けて考えていく必要があると考えている。

今の登別温泉の大きな問題点は、後継者育成と人づくりである。昨年勉強会を立ち上げ、勉強にいそしんでいる。我々の役割は、登別温泉の良さや伝統を後継者に伝承していくことである。我々の人づくり勉強会に若い方々が率先して参加して頂けると嬉しい。これからの日本の温泉地の代表として相応しい地域づくりをする為に、若い方々にも力を尽くしてもらいたい。

外国人観光客が増大したのはここ数年のことで、アベノミクスによる為替の恩恵を受けている結果だと思われる。登別温泉が他の温泉地より優れている点は、観光案内所やリーフレットが多言語に対応しており、また、対応している言語が他地域に比べ非常に多いという点である。一方で、登別を含めた日本の様々な地域で共通している問題点は、公共交通機関が外国人に対して不親切であるという点だ。登別市内の駅は、高齢の観光客も多い中、エレベーターが無い場合が非常に多い。利便性や外装を含め、もっと配慮が必要ではないだろうか。

登別温泉にはまだまだ可能性が残っている。しかし残念なことに、まちについて考えている人が減っている。商店街はどここの地域でもシャッターを下ろしているが、登別温泉は北海道で数少ない商店街が残存している地域でもある。商店街を再興する努力をすることが大切だと思っている。

観光協会のイベントは、市内の多くの方々の力によって成り立っている。そういった意味でも市

る振興策についての意見交換

会 長

民に恩返しをしていかなければならない。

講 話 者

どの様なまちにしたいかを考えなければならぬ。英語などの言語をきちんと整備したら、バックパッカーなどにも対応できるだろう。そうするとバックパッカーを対象にした取り組みなどに拡げることができる。例えば、現在行っている温泉に芸術家を招待している事業なども、明確な位置づけの下やらなければならない。様々な地区や業種の連携に考えを広げてみてはどうか。

会 長

基幹産業とは、他産業に好影響を及ぼし、周囲を含め豊かになるものであるべきだと考えるが、観光を基幹産業と位置付けていく為に、登別市はどうすればいいのか。登別市の観光をどの様に育成していくのか。他産業と観光を連携させ、どの様に活性化していくのか。インフラ整備も含め、より一層深く登別市の観光について考えていくべきではないのか。潤沢な資金があるまちではないので、一定の方向性に向けて一丸となって取り組む必要がある。

講 話 者

そのような登別の経済のあるべき姿、ビジョンを考えていく場として、本協議会が活動しているので、どこまで掘り下げた内容になるかはわからないが、ビジョンを作っていかなければならない。

方向性ができてくれば、市民それぞれがやるべきこと、もしくは連携してやるべきことの形が見えてくるのではないかと考えている。

登別温泉の問題・課題はまだまだある。私が驚いたことは、湯まつりについてである。今年も2月に行われるが、その時期はお客様の8割が外国人である。その状況で日本人向けの湯まつりのプログラムを配布したところで、何の役にも立たない。

先々のことを予測して行動することが不足している。知床は世界遺産に登録されており、観光地として有名だが、外国人観光客の大半がその良さを理解できないまま帰国してしまう。足を運んで

実際に見てみるものの、詳細を外国語で説明できる人材がその場にいない為である。

北海道の観光地によくある問題点は、W i - F i が繋がらない、案内所に多言語を話せるスタッフがいないなどである。しかし登別はW i - F i が繋がるスポットがあり、多言語にも対応している為、そのような点においては恵まれていると思われる。

委員 ガイドの育成という面について、北海道マイスターという資格があるが、受講者の実態はどうなっているのだろうか。

委員 毎年検定試験が開催されており、受けている人は数人いるものの、北海道という単位での資格である為、登別に特化して知識を蓄えた上で対応できる人材の育成には繋がっていない。

委員 ホスピタリティの醸成ということに関して言えば、良い制度があるにも関わらず、道や市町村が活用しきれていないのではないだろうか。

講話者 新幹線の北海道内受け入れについて例に出すと、2年前に観光協会で鹿児島県の新幹線を視察してきた際に、鹿児島県では5年前から県全体でプロジェクトを立ち上げていた。県民一人ひとりがコンシェルジュとなり、お客様を受け入れる為にどう地域のことを知るかということに尽力してきた。ホスピタリティの向上は資金を費やすことが全てではない。地域の意識を変えることにより、向上できると考えている。

新幹線の開業を機会とし、地域のホスピタリティの底上げにうまく活用できないだろうか。

市民優待を始めた年も平成8年である。登別温泉は天与の資源であり、それによって商売が成り立っている。年に一度は市民に良さをわかってもらうことを目的に、市民に使いやすい料金設定にしようとしたのが始まりである。

小学生の体験入湯なども、市民の温泉として愛されるために旅館組合が取り組んでいる。

委 員	<p>登別市に住んでいるにも関わらず、他地域の温泉街に行ってしまう場合が多く、登別温泉はあまり泊まったことがなかった。話を伺っていて登別温泉の泉質は本当にすごいと感じた。</p>
講 話 者	<p>登別は宿屋のレベルが全体に高く、観光客の入込の理由は全体のレベルの高さにある。</p>
委 員	<p>現在、夏場には鬼花火を開催しているが、開催日には観光客がホテルから出て地獄谷に来てくれるという流れが確立され、温泉街全体にとって良い取り組みだと思った。</p>
講 話 者	<p>観光協会は観光業を営んでいる人だけの団体として存在してきたが、観光業以外の人にもしてもらい、多くの人に関わりながら観光を盛り上げていくべきだと思う。鬼花火はボランティアの手を借りながら開催しているが、木曜日と金曜日のみの開催というのが一番の弱点である。通年開催している鬼火の路の方が案内しやすいというのが旅行会社の意見である。ボランティアの方々を手伝ってもらっている状況の中、宿泊者数増加という成果があるのかが開催者側としての疑問である。一度効果を検証すべきである。</p>
委 員	<p>検証しても見えにくいという欠点がある。プロモーション活動と調整事業をしても、効果は2年後3年後に出てくることから、短期的に効果を測定することは不可能である。</p>
講 話 者	<p>観光協会の活動に関して理解している人が非常に少ない。観光協会に一般の人が入れば、もっと市民との交流の輪が広がり、展開の仕方も変わっていくのではないだろうか。</p>
会 長	<p>今回は10月30日(木)午後6時30分から。講師の方を招いて話を伺う。お疲れ様でした。</p>